

性教育と HPV ワクチン予防接種

今日的な女性の健康を守るために重要なこと

大野 泰子

Sex Education and a Vaccination against HPV

- Important Things to Follow the Health of Contemporary Woman -

Yasuko Ono

The German Dr. Housen discovered that uterine cervix cancer was one of the viral infectious diseases in 1983, and the vaccine for uterine cervix cancer was made in 2006. The vaccination is authorized in our country in 2009, and it is expected in late years that the vaccine will enable to prevent from increasing patients of age 20 ~ 30 women.

It is said that the number of autonomy, which performing public assistance of vaccination costs, are increasing from 2011 and the HPV vaccination will be encouraged by administrative advice.

However, it is considered that there is a different meaning from other vaccinations for the students, who are age for HPV vaccination in school.

From June to July in 2010, the publicity of the HPV vaccination was examined through the students around us, and the result was that the spread of knowledge was required with the encouragement of the vaccination in future, and it became clear that the developmental age of mind and body, and psychological support were demanded for the health care about female genital.

In addition, the HPV infection is related with the sexual behavior of the youth, and it is considered that the knowledge and power for the action choice, including the prevention from the sexually transmitted disease, is demanded in an educational front today.

Keyword : the HPV infection, uterine cervix cancer, sex education,

緒言

ドイツ人のハウゼン博士は 1983 年子宮頸がんがウィルスで感染発病することを発見し、2006 年子宮頸がんワクチンが作られた。我が国では 2009 年同ワクチン接種が認可され、近年増加している 20～30 歳代の子宮頸がん予防が可能になると期待されている。

HPV 予防接種は、2011 年度から予防接種費の公的補助化を行う市町が多くなり、行政指導で接種奨励すると聞くと、接種を行う学齢期の生徒等にとっては他の予防接種とは異なった意味があると思う。

HPV 予防接種情報の周知状況を、身近な生徒・学生等対象に 2010 年 6～7 月調査を行ったが、予防接種の勧奨とともに知識の普及は今後期待されることであり、女性器に関する健康管理は心身の発達年齢や心理的なサポートが求められることが明らかになった。

また、HPV 感染は若者の性行動と関係していて、性感染症予防を含め知識と行動選択の力量形成が今日教育現場で求められると考える。

キーワード：性行動、子宮頸がん、性教育、

はじめに

感染症の予防対策として予防接種は大きな成果をあげている。我が国ではまだ認可されていない予防接種があるが、2009 年子宮頸がんの予防のため HPV ワクチンの接種承認がなされ、対象となる 12 歳を中心とした接種が推奨されている。

今日中高生の性行動の早熟化から、性感染症の増加傾向がみられ、エイズや子宮頸がんの発病と関係するといわれている。HPV ワクチン接種の学校における予防接種の啓発が求められているが、学校では性教育が教科の中では取り上げられにくい状況にあり、性交による感染を理解させ、ヘルスプロモーションの実践をサポートしなければならないと考える。

現在の対象となる年齢層等の予防接種に対する動向をまとめ、学校における保健管理・保健教育(性教育)と HPV ワクチン予防接種についての考察を行った。

1章 女性の健康問題と子宮頸がん

1. 1 女性の健康問題の変化

現代の日本女性のライフスタイルは、戦後から急激に変化した。女性の高学歴化が進み、職業を持つ女性が増えたため、出産の回数も戦前の時代に比べて大きく減少し、「いつ子どもをどのように産むか」ということが多様なスタイルとなっている。現在では妊娠・出産が減ることにより、女性の一生における月経の回数は多く、初潮から閉経までの約 40 年間に 400～500 回も月経があることになり、昔の女性の約 10 倍にもあたり、近年では月経に伴って起こる病気が多くなっている。女性器である子宮や乳房を中心に、月経異常や子宮筋腫、子宮内膜炎、卵巣

膿腫、子宮がん、妊娠・分娩・産褥合併症、乳腺炎、乳がん等がある。また女性に多い病気としては、骨粗鬆症や慢性関節リュウマチ、甲状腺機能障害（バセドウ病、橋本病）、緑内障、鉄欠乏性貧血、低血圧症、冷え性などがあげられ、近年「女性外来」など性差医療を行っている病院も見られる。

女性の死亡原因は2009年厚生労働省統計によると、性別全死亡率に占める割合が悪性新生物30.1、心疾患15.8、脳血管疾患10.7、肺炎9.8、老衰3.4である。がんによる部位別死亡率(2005年国立がん対策情報センター)では、乳がん77.5、大腸がん68.5、胃がん56.6、結腸がん47.5、肺がん39.2、子宮がん38.9(子宮頸部がん25.1含む)である。

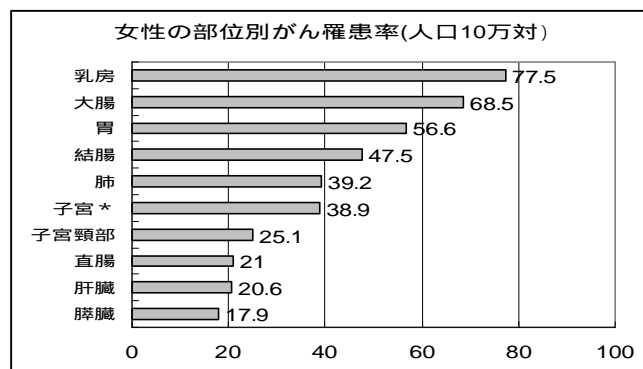
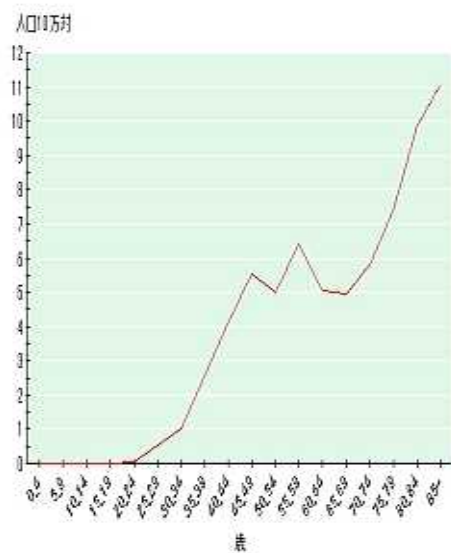


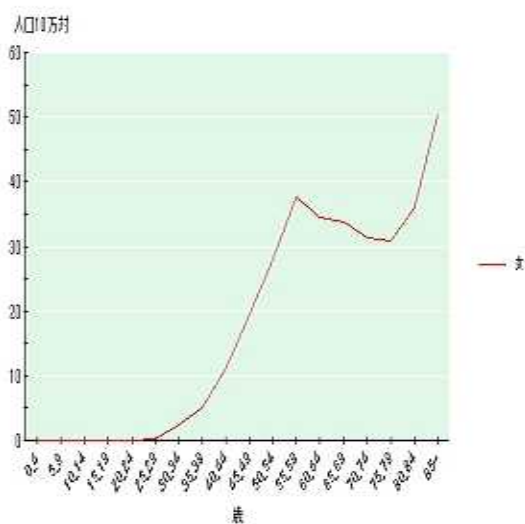
図1 女性の部位別がん罹患率、人口10万対 2005年国立がん対策情報センター

年齢階級別死亡率
【子宮頸2009年】



資料: 国立がんセンターがん対策情報センター
Source: Center for Cancer Control and Information Services,
National Cancer Center, Japan

年齢階級別死亡率
【乳癌2008年】



資料: 国立がんセンターがん対策情報センター
Source: Center for Cancer Control and Information Services,
National Cancer Center, Japan

図2 子宮頸がん年齢階級別死亡率

図3 乳がん年齢階級別死亡率

年齢に伴いがん罹患率は高くなるが、子宮頸がんについては20～30歳代から罹患する女性が多く、最近ではタレントの向井亜紀さん、歌手の坂井泉水さんの罹患によるニュースが目新

しい。

1・2 今日的子宮頸がん

子宮頸がんの罹患は 20 歳代から急上昇し、30 歳代半ばがピークである。

ドイツ人のハウゼン博士は 1983 年子宮頸がんがウィルスで感染発病することを発見し、2006 年子宮頸がんワクチンが作られた。ヒトパピローマウィルス (HPV) は性行為で感染し、頸がんの 90%以上に HPV は陽性である。初期は自覚症状がなく、不正性器出血、性行為時などの接触出血症状がある。ハイリスク感染は HPV16, 18 型の頻度が高く、日本人の子宮頸がんの 58.8%はこの 2 種類が原因であるといわれている。

性交経験者の 70~80%は少なくとも 1 度は HPV 感染したことがあり、健常女性の 10~20% に HPV が検出されている。しかし 90%以上の例で感染があっても 6 カ月~2 年の間に免疫力でウィルスは排除されてしまう。また皮膚や粘膜が擦り合ったときに感染するので、コンドーム使用は感染予防にはならないといわれている⁵⁾。

予防措置としてセックスデビュー前の 12~14 歳の女性を対象に HPV 予防接種実施されることにより、20~30 歳代の子どもを産み育てる年齢の子宮頸がん予防が可能になると大いに期待されている。

予防上最も有効なのは、性交をしないこと、子宮がん検診を定期的におこなうことである。

2章 若者の性行動と性教育

若者の性行動は過去 20 年間の変化が大きい。京都大学大学院医学研究科木原雅子准教授はその特徴を、1 性行動の若年化、2 性交渉相手の複数化・多様化を指摘している⁴⁾。

1984 年東京都性教育協会の性意識行動調査によると³⁾、男子 22%・女子 12%の経験率の回答があったが、2004 年実施の全国高校生調査では高校生の性経験率は男子 30%・女子 39%であった。また若い年齢層で多数の相手を持ち、その相手が不特定である傾向がみられる。

さらに、3 性行動のカジュアル化と 4 性行為の多様化、5 性行動の無防備化を挙げている。性交渉相手の多数化多様化にみられるお付き合い = 性交渉と短縮化傾向にある。1999 年に実施した国民性行動調査では、オーラルセックスは 18~24 歳では 80%の経験があると答えている。若者の間ではオーラルセックスは常態化し、その場合コンドームは使用されていなかった。2004 年の高校生調査で性行為はコンドームの常用は 40%で、性行動の多い人はコンドーム使用率が低い結果となった。このことは性感染症の若年層での増加と関係しており、先進国中で依然増え続けている我国の HIV 感染の危険性を示していると考えられる。

これらの性行動の早熟化は、低年齢からの過剰な性情報の氾濫と、家庭におけるつながりの低下が原因しているというデータが全国高校生調査にも現れていると分析している。

小中高等学校において性教育は「寝た子を起こすな」というより、「正しい目覚めの提供」

を目標に、学校と家庭が連携し実施していかなければならない課題である。

子どもたちが性に関して系統的かつ計画的に学習できるのは学校における性教育である。

3章 HPV 予防接種の意識調査

3・1 調査の方法

- 1) 調査対象：短期大学生 130 人、高校生 47 人、養護教諭 23 人、いずれも女性
- 2) 調査内容：予防接種動向、子宮頸がんの知識
- 3) 調査方法：HR 活動（養護教諭は研修会場）の時間に各クラスにおいて自記入式無記名調査で、倫理的配慮を充分払い、目的外使用をしないことを明記し実施した。
- 4) 分析方法：結果を Excel データー入力し、統計ソフト SPSS を用いて解析した。

3・2 調査結果

高校生・短大生と大人である養護教諭の答には大きな差が見られた。最近の高校生の性体験が 4 割と報告されている（2005 年全国高等学校 PTA 連合会）が、子宮に関係する知識は行動とは異なった結果となった。

子宮頸がんが乳がんに次いで女性に多いがんであるという知識がある割合は、高校生が 26 人（55.3%）短大生 93 人（52.5%）養護教諭 21 人（91.3%）であった。（図 4）

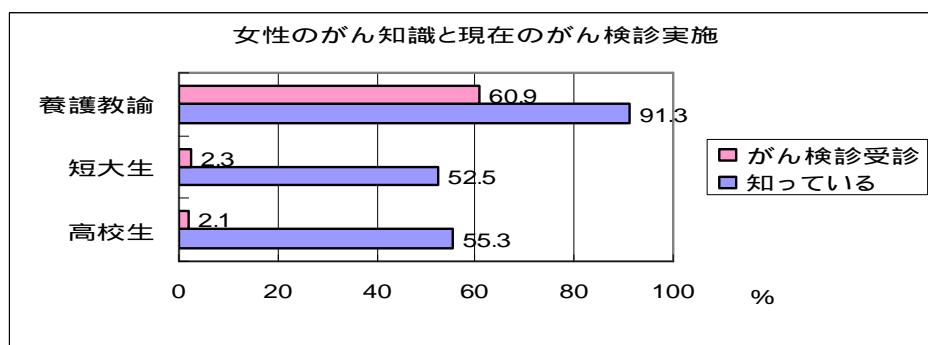


図 4 女性に多いがんの知識とがん検診の既経験

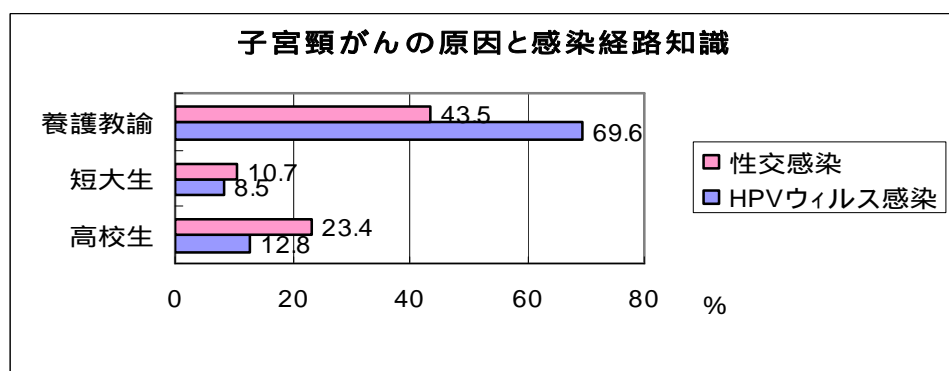


図 5 子宮頸がんの原因と感染経路の知識

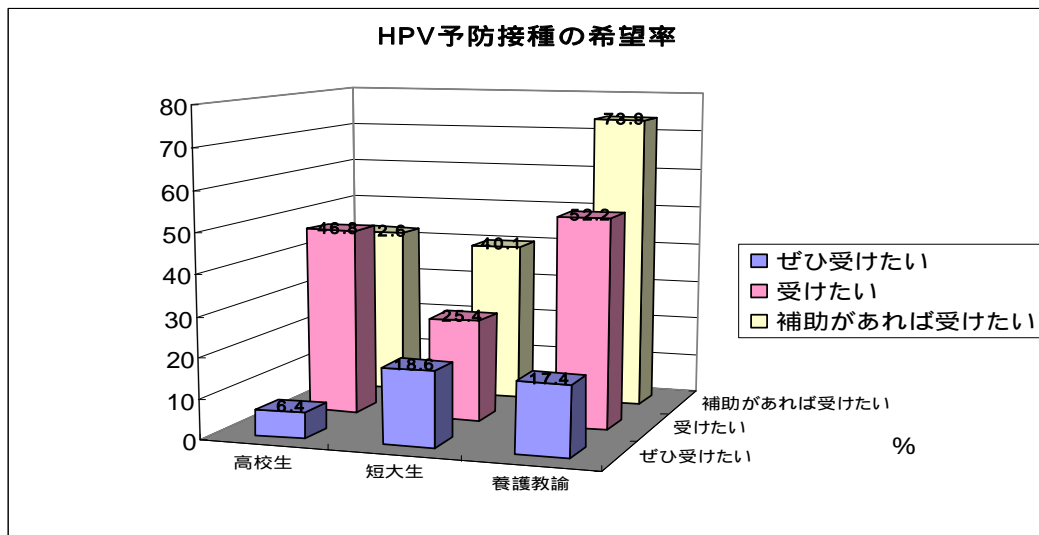


図6 HPV 予防接種の希望率

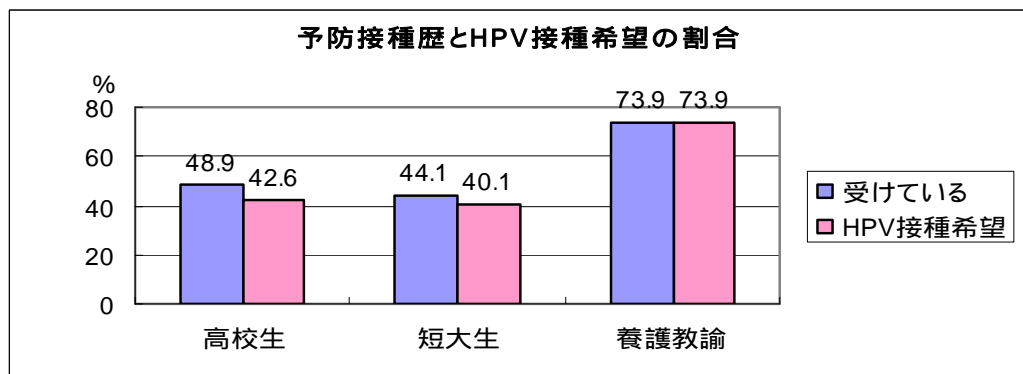


図7 予防接種習慣と HPV ワクチン予防接種の希望率

表1 子宮頸がんの知識と予防行動の調査(2010年7月)

	高校生 (n = 47)	短大生 (n = 130)	養護教諭 (n = 23)
1 予防接種の実施状況	48.9	44.1	73.9
2 子宮頸がん発生の多さ	55.3	52.5	91.3
3 子宮がん検診の既経験	2.1	2.3	60.9
4 子宮頸がんの原因	12.8	8.5	69.6
5 感染経路の知識	23.4	10.7	43.5
6 HPV 予防接種実施許可	15.2	14.7	47.8
7 HPV 予防接種の希望	6.4 (46.8)	18.6 (25.4)	17.4 (52.2)
8 公費補助で実施希望	42.6	40.1	73.9

9 有効接種対象年齢知識	10.6	15.3	30.4
10 接種後の検診動向あり	2.1(29.8)	4.5 (31.6)	21.7 (65.2)
ぜひ受けたい回答（受けたい回答） 受ける回答（できるだけ受ける回答）			

表 2 予防接種志向の相関

	予防接種志向
定期健診希望	.290** 0.00
予防接種希望	.321** 0.00
補助金で接種	.234** 0.02

1%水準（両側） $P < 0.01$

子宮頸がんの原因や感染経路、昨年度予防接種として承認されたことなどの知識は、高校生・短大生とも 1 割程度しかなく、養護教諭においても感染経路や、承認接種可能の知識は半数程度であった。（図 5、表 1）

質問 1 のこれまでの乳幼児期からの予防接種層については、ほぼ受けていると答えた高校生 23 人（48.9%）、短大生 78 人（44.1%）、養護教諭 17 人（73.9%）であった。そして HPV 予防接種の対象と仮定して実施希望の質問では、ぜひ受けたい、受けたいの回答を合わせると、高校生 25 人（53.2%）、短大生 78 人（44%）、養護教諭 16 人（69.6%）であった。1 名であったが短大生で既に接種済みと記入している学生もみられた。一方受けないと答えたものは高校生 1 人（2.1%）、短大生 5 人（2.8%）、養護教諭 4 人（17.4%）であり、わからないと答えたものが、高校生 21 人（44.7%）、短大生 47 人（26.6%）、養護教諭 3 人（8.7%）であった。また接種料金が高額であることから、接種する場合に公費補助に関係なく接種したいと積極的に希望するものは高校生 3 人（6.4%）、短大生 13 人（7.3%）、養護教諭 0 人、補助があれば受けたいとするものが、高校生 20 人（42.6%）、短大生 71 人（40.1%）、養護教諭 17 人（73.9%）であった。さらに HPV 予防接種後も定期的な子宮口の細胞検診が必要であるが、検診の動向を受ける、できるだけ受けるの回答を合わせると、高校生 15 人（31.9%）、短大生 64 人（36.1%）、養護教諭 20 人（86.9%）であった。

また記述の欄では、生徒や学生の意見では予防接種は大切であるので接種したほうが良いという意見が多く、接種料金が高額であるため公費負担を望む意見があった。養護教諭からは、まだ知識の浸透が不十分であること、感染予防のデーターの危険性を危惧する意見が書かれ、また公的補助がなければ接種の普及は難しいという意見があった。

4章 考察

HPV ワクチン予防接種が H21 年 10 月国内承認され、12 月 22 日から医療機関で任意予防接種として実施可能となったが、調査結果から若い世代の子宮頸がん予防のために、知識の周知徹底は重要であり、接種率は接種料金の公的補助の広がりによって比例するように思われる。

この調査の結果、一般予防接種の動向を健康行動の基本として、HPV ワクチン接種に係る項目の関連性を検討したところ、予防接種を良好に実施している者は HPV ワクチン接種により肯定的な行動を取る傾向にあった。(表 2)

HPV ワクチンの知識理解については養護教諭であっても現時点ではあまり周知されていないので、今後研修の機会を設けることが必要であると考えられる。また HPV 予防接種は希望するが、婦人科特有の内診を伴う子宮がん検診は、高校生や短大生の大半は抵抗が大きい。

小学校高学年～中学校にかけてのセックスデビュー前の予防接種の奨励は、接種者にこの予防接種実施の意味を説明することを一つの機会として、現在タブーとされている「性交」について正しい知識を知らせる性教育の機会となることを提案したい。若者の性行動の早熟化からこの機会をのがすことなく、性感染症予防啓発につながる性教育のチャンスでもあると考える。また性教育は人間教育ともいわれ、精神面の相手を大切に育む心にアプローチする指導であるが、教育現場の先行にならぬよう配慮の下で、家庭と連携し実践していきたいと考える。さらに、HPV ワクチン予防接種は子宮頸がんのハイリスクの遺伝要素を持った子どもには、より積極的に紹介したいところである。

予防接種だけでなく、同時に婦人科における検診を受けることが重要であり、20 歳からはむしろ検診を定期的に行なっていくことが望まれる。そのためには簡易にできる検査方法の開発・周知を今後望みたいところである。

< 参考引用文献 >

- 1) 厚生労働省、統計調査結果、報道発表資料、「日本における人口動態の概況」、2007 年
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/gaikoku07/04.html>
- 2) 国立がん情報センター最新がん統計、がん情報サービス、2005 年
<http://ganjoho.ncc.go.jp/public/statistics/pub/statistics01.html>
- 3) 木原雅子「現代社会と若者の性行動」母子保健情報 第 60 号 2009 年 11 月
- 4) 木原雅子「若者の性行動と性感染症予防対策」日医雑誌第 126 巻第 9 号 2000 年 11 月
- 5) 安達知子「ヒトパピローマウィルスワクチンとがん検診に意義」保健の科学第 52 巻第 8 号 2010 年
- 6) 大野泰子「保健管理と予防接種 HPV ワクチン予防接種実施の動向から」第 18 回日本養護教諭教育学会抄録集